

奥の正法寺

平成31年3月第2週放送

曹洞宗には永平寺・總持寺と大本山が二つある事は皆さまもご存知かと思ひます。さらに古くは、東北に曹洞宗第三の本山と呼ばれたお寺があります。それが、岩手県奥州市にある正法寺です。東北地方を古い呼び方では奥羽といい陸奥の国と出羽の国でした。そこから奥羽の奥をとって「奥の正法寺」と呼ばれたようです。ではなぜ、正法寺が第三の本山と呼ばれたかということ、理由は三つあります。

一つは、一三五〇年と一四四一年に時の朝廷より、綸旨（りんじ）という公の文書を賜り、お墨付きを賜ったこと。

二つは、正法寺の住職になると当時は、朝廷が認めた僧侶の最高位の衣を着用することが出来たこと。

三つは、東北地方の曹洞宗の僧侶は両大本山の永平寺・總持寺へ赴かなくても正法寺で、仏の教えを正しく受け継いだと報告する儀式を受け、一ヶ寺の住職となることが出来たこと、があげられます。

奥の正法寺は、正式には「大梅拈華山円通正法寺」といい一三四八年にお寺が開かれ、室町時代に開創された寺院です。長い名前ですが、最初は「拈華山正法寺」でした。しかし、お寺を開かれた無底良韶禅師が、正法寺で梅の花がたくさん咲き誇る夢を見、あまりにも印象深かったので「大梅」大きな梅と名付け、お釈迦様から正しく伝わった仏の教えを受け継いだ「正伝の仏法」が円かに通じるようにと「円通」を付け「大梅拈華山円通正法寺」となりました。禅師はこのお寺の名前を変更しないようにと書き残しています。江戸時代には徳川幕府による「武家諸法度」などが出された一六一五年に、「寺院諸法度」が発布され、曹洞宗の寺院は永平寺か總持寺のどちらかに所属しなければならなくなったため、正法寺は「東北の本山」の格式を失い、現在は大本山總持寺の末寺としての地位を担っています。

正法寺は山の中にあり、七二〇坪の面積を誇り、その建物は、禅宗様式の七堂伽藍であり、本堂は、世界最大の茅葺屋根といわれ、惣門と呼ばれる大

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

きな門と共に平成二年に国指定の重要文化財になっています。

正法寺は、坐禅修行を行っている修行道場でもあります。住職をはじめとして修行僧が坐禅を中心とした修行を日夜行っています。四季折々に変化する境内の景色を見ながら、自らを見つめなおすには絶好のお寺です。

正法寺に参詣するには、東北新幹線の水沢江刺^{みずさわえさし}駅からバスで約二十五分、是非一度お参りされてはいかがでしょうか。

— 終 —